



【写真2】柳河郵便局電信室



【写真1】柳河郵便局電話交換室

この春から、スマートフォンを対象に高速大容量の第5世代移動通信システム(5G)のサービスが始まりました。5Gは大都市からスタート。全国に広がるのはまだ少し時間がかかりそうですが、普及すればますます便利になりそうです。現在、携帯電話各社がサービスにしのぎを削っています。日本では、1990年代から携帯電話が普及。それ以前は、電話と言えば固定電話が主流でした。

電話は、明治9年にアメリカのグラハム・ベルが発明し、日本では明治23年に東京・横浜間で電話が開通しました。『柳河新報』明治37年1月25日号に、柳河郵便局と沖端受取所の間に電話線を架設中との記事があります。これは柳河郵便局内に公衆電話を設置するためのものだったようです。電灯の設置や軌道の整備とともに、柳河町発展のために多くの人が期待していた加入者電話。明治44年になると柳河町役場が加入者を募集し、柳河郵便局を増築して電話交換機を備え付けました。

明治44年11月11日に加入者電話の通話業務が開始。加入者数は柳河局で45にとどまりました。当時の電話加入にかかる費

戦前期の電話

柳川古文書館 白石直樹

用は高額だったため、官公庁の他、一部の富裕層の加入にとどまったのです。しかし『柳河新報』同年同月15日号では、早くも「柳河の電話は盛んなこと、交換局の多忙は驚くほどである」との読者の声が寄せられています。ちなみに、当初の交換手は2人でしたが、区域外通話が1日平均25通話あって対応が困難になったため、翌45年には1人増員されています。

写真1は、戦前の電話交換業務の様子が分かる「柳河郵便局電話交換室」という絵はがきです。この絵はがきは、『柳河新報』昭和7年5月21日号に「柳河郵便局の絵葉書」という記事があることから、同年に作成されたものと考えられます。この絵はがきには、交換機に向かい交換業務をおこなう女性が4人写っています。交換業務とは、通話ができるように回線をつなぎ換える仕事のことです。電話をかける側はまず交換手につながり、交換手が手動で相手方の電話につながるというものです。

写真2は、柳河郵便局内に備えられた電報を扱う電信室です。このように、戦前期においては郵便局で電信電話業務を扱うのが一般的でした。

市史編集委員会では、数年後に写真を中心とした本を刊行する予定です。現在さまざまな写真や絵はがきなどを集めています。隔月1日号に、同委員会で集めた写真を紹介します。

【問】市生涯学習課市史編さん係 ☎72・1275

立花宗茂 と闇千代 ドラマプロット

—こんな大河ドラマが見てみたい—
第23話

■文=小山田桐子/榎D&N ■イラスト=大久保ヤマト
※この物語は史実を基に、一部フィクションで作成されています。
【問】市観光課観光推進係 ☎77・8563

第4章 奇跡の復活劇、立花宗茂という武将がいた！④

家臣・十時撰津、町でごろつきに絡まれるそのあざやかな攻防のたちまわりに見物人がどよめく

調べを受ける撰津、この事件が宗茂復活のきっかけに

長い長い浪人生活の最中、虚無僧として生活費を稼いでいた十時撰津が、3人のごろつきに絡まれる。騒ぎを起こしては宗茂に迷惑がかかると、十時は戦いを避けようとする。しかし、抜刀したごろつきに襲われ、十時は仕方なく尺八で応戦。刀を奪い、ごろつきたちを一瞬にして切り殺す。

そのことは問題となり、十時は捕らえられてしまう。幸い

すぐに無罪放免となるが、それは家康を陰で支える男・本多正信が動いたおかげだった。

利用するつもりが、宗茂に惚れ込んでしまった本多正信

影のフィクサー正信の押しで、ついに大名復帰へ

十時撰津の事件を耳に挟み、気にするそぶりを見せる家康。以前から、宗茂を憎からず思う家康の本心を見抜いていた正信は頃合いと見て、「もうそろそろよいのではありませんか」と声をかける。

正信は以前から宗茂の手駒としての利用価値を感じて、情報収集をしつつ浪人中の宗茂が腐らぬよ

う目配りをしていただ。

同じく浪々の身を經た自分と比較し、彼の不器用さに苛立ちを感じつつ自分とは違うその生き方を意識してしまうのであった。が、いつの間にか、自分こそがなんとかしてやりたと思うようになっていった。

家康は秀忠に將軍の座を譲つたばかり。まだまだ將軍として頼りない秀忠を支える人材が必要な時でもあった。宗茂は秀忠に拝謁。陸奥棚倉に1万石を与えられ、ついに大名に復帰する。旧領回復とはならなかったものの、長い長い浪人生活を支えた家臣たちは喜びに沸いた。

～人物紹介～

宗茂と共に生きた有名武将たち④

伊達政宗 (1567～1636)



宗茂と同じ年に生まれ、対照的に生きたライバル武将。計算高い野心家。まっすぐ秀吉の心を捉えた宗茂を強く意識し、裏があるはずと疑ってかかる。戦国時代が終わると、存在意義を失い、次第に酒におぼれるようになるが、晩年は宗茂の茶飲み友達に。

真田信繁 (1567～1615)



宗茂と同じ年に生まれ、侍として散ったライバル武将。根っからの武人で、宗茂とは政治的な駆け引きを苦手とする者同士、意気投合。豊臣家のために戦い続け、大阪の陣では壮絶な戦いぶり、その名をとどろかせる。宗茂は信繁の遺児を託されることに…。

